

まえがき

少子化時代をむかえたが、日本は大学、短大への進学率が45%に達している。しかし、大規模大学と中小規模大学との志願者数の格差は拡大傾向にある。現在、私立大学の約五割が定員割れに喘いでおり、その定員割れ大学はいずれも定員が八百人未満の中小規模大学である。

高等教育のユニバーサル化、大学全入時代の到来がいわれる中で、「学士課程教育」という概念のもとに教育内容にも変革が求められている。中教審の答申が提唱する「学士力」は、①知識・理解、②汎用的技能、③態度・志向性、④総合的な学習経験と創造的思考力、である。従来、大学で学ぶべき最重要事項とされた「知識・理解」は、「学士力」の One of them なのである（絹川正吉「学士課程教育と教養教育」『IDE現代の高等教育』No.505、二〇〇八年十一月号20頁右）。従って、ここでは、何を

教えるかではなく、何を身につけさせるかが求められていることになる。これは、換言すれば、就中、中小規模大学は、研究よりも教育に特化せよ、と指示しているように思える。

かかる傾向の強まる文部行政の流れの中、忘れてならないのが人間教育である。幸い、本学は、宗教系大学として仏教精神を建学の精神にしている。

展開される教育活動は、私学であつてみれば、建学の精神の具現化でなければならぬ。現状に沿ったその具現化の歩みが、本学においても始まったといえよう。

すなわち、本学の建学の精神である「眞実心Ⅱ慈悲の心」は、まず、入学以前から卒業後にまで及ぶ学生一人一人に対応した親切的な教育、いわゆる「エンロールメント・マネージメント」の形をとる。この理念にもとづく教育方法は、「京都光華のキャリア教育」として、また「学生個人を大切にした総合的支援の推進」として文部科学省のGPに二年連続して選定された。

目下進展中の学部の新設、改編計画中の内、「キャリア形成学部」の新設は、とりわけ建学の精神の具現化に適ったものといえよう。近時、大学へ入学はしたものの自

分は何を学ぶべきか、何に向いているのか、社会人としていかに生きていくべきか、といった、いわゆる自分の人生のキャリアを描けぬ学生が増加している。かかる学生に「学士力」「社会人基礎力」を身につけてもらおうとするのが本学の志向する「キャリア形成学部」である。

さらに、新設を目指している「看護学科」は、仏教の慈悲の精神にもとづく看護教育を看板にするものである。死に直面する患者さんにどんな言葉でどんな姿勢で接することができるか。看護師さんの一つの言葉、姿勢が、患者さんが安心して死をむかえることができるか否かの重要な要因となるはずである。

そこに、慈悲の心がいきるはずである。その慈悲の心は、こちらが一段上に立って、言葉をかけてあげる、何かを恵んであげる、施してあげる、といったことでは決してない。それでは仏教の慈悲とはいえない。

あなたの命も私の命も、生かされている存在としては全く同一、平等なもの、という視点に立たなければならぬ。そこにおいてこそ、あなたの苦しみを喜びを共感、共有する慈悲の世界が展開する。自ずと謙虚な包容力に富んだ「ささえあいの心」と

なるはずである。

本誌は、本学主催の恒例の「宗教講座」における講話を収録している。佐々木先生ならびに拙稿によって、右の慈悲の心が生まれてくる根源の「縁起の理」（仏教の根本思想）についてご理解を深めていただければ幸甚である。

羽塚先生には、浄土真宗の「節談説法^{せつだん}」というお説教が、日本の話芸——落語、狂言、浄瑠璃、漫才、浪曲等、あるいは演歌の源流になっていることを具体的に実演をまじえて明らかにしていただいた。その「節談説法」の中心テーマは、アミダ仏の慈悲についてである。その慈悲の心が聴く者に涙と感動をもたらし、話芸が長く伝承されてきた理由であろう。

レップ先生の講話では、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』を題材に人間と動植物をふくめた自然環境とのかかわり方について注意が喚起された。自然環境を人間の欲望の対象として利用することになりがちな現代人に対し、自然環境とのコミュニケーションの必要性を訴えられた。かかるコミュニケーションこそ慈悲の心のなせるわざといえよう。

右の如く、本誌は奇しくも、仏教の根本真理である縁起の思想にもとづく慈悲の心を語る講話集となった。本誌の読者がこれら講話をお読みくださり、慈悲の心を理解され、日常生活において活かして下さらんことを念ずる次第である。本誌が社会に潤いを与える一助となることを期待してやまない。

京都光華女子大学・

同短期大学部

学長 一郷正道